

# 鈴木松塘の詩論と袁枚

松 下 忠

本稿は、昭和三十九年度科學研究費—江戸時代の詩風・詩論における性靈説の系譜—による研究成果の一部で、先ず松塘の詩論が性靈説に近い事を明らかにし（三の1）、次にその性靈説は袁枚を學んだものである事を具體例を以て證明し（三の2）、終りに松塘の詩論は宋詩と性靈説を中心とする折衷派である事を結論する（四の2）

## 一 松塘の梗概

鈴木松塘（文政六年一八二三生—明治三十一年一八九八歿<sup>（西記を用いる）</sup>七十六歳）は、名は元邦、字は彦之、松塘は號、別號を十嵯叟堂・懷人詩屋・東洋釣史・晴耕雨讀齋・房山樵客と云う。安房の人で少年時代は郷土の岩崎樵齋に學んだが、天保十年十七歳の時眼科醫の家業を棄てて江戸に上り、梁川星巖の門に入つて詩を學んだ。次の引用文は親交のあつた松霧師に關する記事であるが、大沼枕山を介して松霧師と共に星巖に入門したことが分る。

(1)……余年甫十七、自<sup>レ</sup>房來<sup>レ</sup>都、寓<sup>ニ</sup>于東臺勸學校院。時師先已在<sup>ニ</sup>院中、……頃之因<sup>ニ</sup>予交<sup>ニ</sup>大沼子壽、後又介<sup>ニ</sup>子壽、執<sup>ニ</sup>贊於星巖先師。<sup>（房山樓遺集<sup>（以下遺集と略稱する）</sup>附錄、松霧山房遺稿序）</sup>

かくして星巖の玉池吟社に在つて教を受けたのは僅かに三年であつたが、忽ちにして森田梅圃と並んで玉池吟社の二才子と評せられ（松塘小稿序）、俊秀として名を顯し（重野安繹撰小傳）、天保十五年二十二歳の頃は、毀譽大いに起り、爲に氣を煩わしたという（松塘詩鈔卷一、入都訪子壽芝山寓院）。師に對する情誼は極めて篤く、一例を示すと、

(2) 乙巳四月二十六日、得星巖先生書并詩。

先生將西歸。是月二十日設留別筵。邦也

僻在海陬、不得與焉。不堪慨歎。賦此奉

送、情見于詩。

其一 松塘詩鈔 卷一

讀到三分離、便黯然 相思一幅鴈頭箋

祖筵有夢空添淚 後會無期轉可憐

教育恩深同骨肉 箴規情切最纏綿

誰知賤子傷心極 病在蠻風蠻雨邊

別離の便りを讀んで黯然とし、送別の宴に列席し得ないことを悲しんで夢中に涙を流し、一度別れたら二度と會う折のないのを憐れとし、師恩の深いのは骨肉と同じであり、師が箴規を垂れる時の眞情は最も纏綿たるものがあつたが、今その師と別れる私の傷心の極を誰が知つてくれようと、句句師弟の情の濃やかさを示している。

松塘の人と爲りは如何。二十一歳の時に刊行した松塘小稿の中から一首を選ぶと、

(3) 春日寓懷 四首の内 其二

生涯爛漫任天真 敢望文章絕等倫

終歲每因耽酒病 一家長爲讀書貧

也知富貴皆歸夢 須信功名到底塵

唯此初心金石固 便應垂釣老江濱

生涯を天真に任せ、詩文に於ても等倫に冠絶しようと望まず、終歲酒に耽り、書を讀み、富貴に超然として、自然を友

とし、釣糸を垂れて老ゆる事を期するといふ風であつた。このような生活態度は終生變らず、五十歳の時に成つた快説續續紀の中でも、權門に赴かず、名を文場に爭わず、月花を友とし、酒に酔い詩を吟ずるを痛快事となすと云つてゐる。明治の新政府が成立して破格の拔擢が行われたので、一藝一能ある者は競つて仕進したが、松塘は之を恥とし、生涯官仕しなかつたのも、このような人と爲りであつたからであらう。

松塘は行游を好み、その作品集は、西游存稿・北越存稿・超海集（北海游草）・北游存稿・香山游草・甲信游草・芳雲游稿・再北游稿・飛山游草など頗る多い。行游に明け暮れた松塘の本居は、明治三年四十八歳以後は江戸の淺草向柳原であり、その居を七曲草堂と云い、七曲吟社を設立して子弟に教授し、詩壇に活躍した。有馬子龍・關世卿等は早くから參加し、世卿には「明治十家絶句」があり、二人の共編に「七曲吟社絶句」がある。松塘は又尊王慷慨の詩を多く作つてゐるが、これにも星巖の影響を看過してはならない（房山樓詩卷四、十月朔接横山舒公信。聞星巖先生於九月二日捐館舍。設位哭之。による）。

松塘の著書は、第一類詩文集、第二類游行詩集（前述）、第三類隨筆の三種に大別することができる。詩文集を刊行の順に挙げると、松塘小稿一卷、松塘詩鈔二卷（房山樓集初編）、房山樓詩四卷（同二編）、房山樓集三編四卷、房山樓集遺集であり、隨筆には「快説續續紀」一卷があり、金聖歎の「快説」と王丹麓の「續紀」に續ぐの意を寓したことを明らかにしている。

## 二 詩文を以て任ずる

既に述べた通り松塘は早くから詩才を以て稱せられたが、自らも亦經學を以て任ぜず詩文を以て任じた。安政三年三十四歳の時の作に「粗才寧有學經世、浪跡只因詩紀行。」（房山樓詩卷三、將發京師、留別星巖先生紅蘭夫人及同社諸子。）の句があるが、經學・經世を以て任とせず、詩人として各地を漫遊した事を明らかにしたものである。明治元年四十六歳作

の「西游存稿」と題する詩（房山樓集三編以下三編と略稱する）卷二には自ら「詩翁」と稱して漫遊の事について詠んでいる。經世を以て任じなかつた松塘には詩文が經濟よりも優るものであつた。その證據に明治二十六年七十一歳の新年の作「癸巳新年作」（遺集卷四）に

(4) 敢道文章掩經濟、祇應行樂了生涯。

の句があるが、この句は衆賢が廟堂に在つて時政を論ずることに言及した後に、文章の價值は經濟を掩うものであると敢て明言すると、新年に當つて述懐したものである。壯年より老年に至るまでこの態度で一貫したのであつたが、その事に全く抵抗を感じなかつたというわけではない。文久二年四十歳の時次のような詩を作っている。

(5) 廿載 房山樓詩 卷四

廿載清狂詩作魔 嘲花睥月竟如何

而今慚悔臍難噬 手把殘經鸞欲啼

二十年間詩魔に取りつかれて嘲花睥月の人生を送つた。今にして臍を噬み、殘經を手に把つて經學を學ぼうとしても、白髮の今日では時既に遅くどうにもならないという氣持もあつたのである。師の星巖も詩文を以て任じた松塘の風貌を活寫している。

(6) 讀鈴木彦之松塘集、題二律。彦之名邦、

谷向村人、弱冠嗜詩酒如命。風流瀟洒。

余乃以糟糠破裏崔宗之目之。

其二（前聯のみ） 星巖戊集 卷二

襟韻灑然非世情 一枝詩筆萬緣輕

漁樵以外無同輩 風月之間寄此生

松塘の襟韵は灑然として世情を超越し、一本の詩筆を生命とたのみ、それに比べると萬事取るに足らぬものと輕視し、漁樵のみを友として、風月の間に生を寄せているという意味で、前聯の語すべて詩人松塘の風格を表現している。特に「一枝詩筆萬緣輕」の句は詩を主とするものの眞面目を道破したものである。明治七年五十二歳の時に潤筆料を明示して賣文生活を表明した詩がある。

(7) 戲題潤筆例後并序

三編 卷四

潤筆例成高自揭 騷壇聊占著鞭先

只愁此後無人願 轉使吾詩不直錢

世人は詩人の賣文鬻字を毀るのが例である。世の非難を物とせず、敢て文壇に先鞭を著けた行爲は、詩文を以て任じ、詩に生涯を捧げんとする専門詩家の信念の表明と解したい。

松塘は詩を以て著わるるほか文章をも能くしたことは、蒲生襲亭（房山樓集三編序・快說續續紀跋）や川田蕤江（三雲絕句序評）や小山朝弘（北游存稿序）等が同音に指摘する所である。而してその文は簡潔にして冗語無く、平易にして麗句無く、辭達して艱澁の病がない。

三 詩風・詩論

松塘が詩を星巖に學んだのは天保十年（一八三九）で、星巖は時に五十一歳、唐詩派でもなく宋詩派でもなく、性靈派でもなく格調派でもなく、唐詩中心性靈說中心の折衷派となつていた時期であつた。このような星巖に學んだ松塘の詩風・詩論はどうであらうか。

1 性靈說に近い

弘化元年二十二歳の除夜に詩を祭つて、一字の推敲雕蟲に強いて精力を費したことを後悔すると述懐している。

(8) 除夜祭詩後有作

松塘詩鈔 卷一

一字推敲枉費功 半生我慚悔雕蟲  
可憐三斗閑心血 嘔向酒悲詩瘦中

今まで一意心を靜めて推敲雕蟲に功を費した三斗の血を、嘔吐して酒に向わしめ、又詩を飾つて腴膏ならしめんよりも飾らずに瘠瘦たらしめんと志したと詠んだものである。實際の作品集について觀ても、二十一歳の時に刊行された松塘小稿や二十四歳までの作品を集めている松塘詩鈔卷一よりも、二十五歳以後の作品を収めた卷二の詩が雕蟲の痕が少く、性情を率直に表しているように感ずる。例えば「鴨水雜詠」と題する七絶十首（詩篇省略）は何れを取つても巧まぬよい作品であり、その他の作品も概ね同様な印象を受けるものが多い。この頃の松塘の詩風の變化について論及した先人がある。

交友の一人鷺津毅堂の「松塘詩鈔後序」によると、弘化三年二十四歳の頃と、嘉永三年二十八歳の頃とを比べると、その間に全く別人のような人間的成長が見られたことを明らかにしている。二十四歳の松塘と江戸の大沼枕山の宅で初めて對面した頃には「意氣倜然無所顧護。酒酣賦詩、下筆縱橫、大篇立就、駿發驚人。」であつたという。數年の後房州に赴いて會つた時は「彦之容貌辭氣、恭謙抑退、叩其近業、則辭而不取輒出示。」であり、その人柄の變化の著しさに驚いたと云う。而して嘉永四年松塘は二十九歳、松塘詩鈔の詩稿を寄せられたのを見ると、その詩は「句煉字鍛、沈鬱深穩、兼之閑雅瀟遠、歛其奔放、寢就規矩、駸駸乎入於作者之域矣。」であつたと云う。これによると松塘の詩風は二十五・六歳を境として、その性格その容貌辭氣の變化と共にその詩風も變化したという見解である。

二十五歳と云えば弘化四年（一八四七）にあたるが、この年の秋詩を作り、自分は平生頗る奇を好み、天も亦常套を厭い、自分待つて變局を出さしめたと明言している。

(9)……我曹平生頗好奇、對此神魂忽超卓。可知天公厭常套。故待遊人出變局。（松塘詩鈔卷二、丁未中秋遊野島碕觀月、晚際風雨俄至。既而雨止月出。二更月蝕。作歌記之。）

又嘉永六年三十一歳の作「登一覽臺作歌」(房山樓詩卷二)と題する長篇の冒頭には、

(10) 登<sub>レ</sub>山 不<sub>レ</sub>厭<sub>レ</sub>險、 作<sub>レ</sub>詩 不<sub>レ</sub>嫌<sub>レ</sub>奇。

という句もある。かくの如く松塘は二十五・六歳以後奇を主張し、その作品には、著想表現に於て生新奇譬の調を帯びたものが多くなる。房山樓詩の中から一・二の作品を挙げると、引用18の領聯の句「三春綺夢風前遠、十里珠簾雨裏涼」は生新であり、又三十四歳作の詩

(11) 題高洋瀾卿水石亭 房山樓詩 卷三

石如渴驥競奔泉 松似騰龍躍擧天

岐岨溪山三百曲 君家縮致一庭前

に於て、起・承句の石を狀し松を狀する所、轉・結句の水石亭を總括する所、著想の妙は勿論常套の表現ではない。

新奇の主張に因んで、もう一首萬延元年三十八歳の作に注目したい(錄前半)。

(12) 蒲生子闍來訪、見贈短古一章。乃次其韻

以酬。子闍精軒耆術。 房山樓詩 卷四

我亦厭<sub>レ</sub>讀<sub>二</sub>爛熟詩<sub>一</sub> 難<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>好句開<sub>二</sub>愁眉<sub>一</sub>

忽然柴門聽<sub>二</sub>剥啄<sub>一</sub> 倒屣相迎如<sub>二</sub>舊知<sub>一</sub>

欽君新詩出<sub>二</sub>肺腑<sub>一</sub> 結<sub>二</sub>撰血性足感慨<sub>一</sub>

世上小兒誇<sub>二</sub>雕蟲<sub>一</sub> 憫渠眼孔如<sub>二</sub>豆大<sub>一</sub>

第一聯についてみると、爛熟の詩をば讀む事を厭い、得難きの好句に愁眉を開いたというから、爛熟の詩に對する好句とは恐らく新奇の句であろう。何となればそれは「欽す君が新詩の肺腑より出で云々」と云い換えられているからである。而してそのような新詩は雕蟲を誇る世上の群小詩人では不可能の事であるから、雕蟲を誇る人々の眼孔の小を憫笑す

ると結んだのであろう。

松塘は自ら主宰した七曲吟社の七言絶句を集めた詩集「七曲吟社絶句」(既述)に序文を寄せ、詩を撰ぶ方が詩を作るよりも困難であると述べて曰く、

(13) 撰詩難ニ於作詩。作之者、不<sub>レ</sub>過<sub>二</sub>寫<sub>一</sub>性情所感與<sub>二</sub>耳目所<sub>レ</sub>觸、而<sub>レ</sub>韵之焉耳。(遺集附録)

これによると、詩を作るには性情の感ずる所と耳目の觸れる所とをそのまま寫せばよいという意見である。又詩は其の人の心血の注ぐ所、性靈の寓する所であると定義している。

(14) 夫人苟能<sub>二</sub>藝、孰不<sub>レ</sub>欲傳之。況詩者其人心血之所<sub>レ</sub>注、性靈之所<sub>レ</sub>寓、欲<sub>二</sub>其不朽<sub>一</sub>亦人之情焉耳。(遺集附録、二禪合集序)

ここに「詩は性靈の寓する所」と「性靈」の語を用いているが、以上の引用文に於て松塘の詩論を示す主張點、例えば(イ)「悔<sub>二</sub>雕蟲<sub>一</sub>」(引用8)、「世上小兒誇<sub>二</sub>雕蟲<sub>一</sub>」(引用12)、(ロ)「新詩出<sub>二</sub>肺腑<sub>一</sub>」(引用12)、「心血所<sub>レ</sub>注、性靈所<sub>レ</sub>寓」(引用14)、「結<sub>二</sub>撰血性<sub>一</sub>」(引用12)、(ハ)寫<sub>二</sub>性情所感與<sub>二</sub>耳目所<sub>レ</sub>觸<sub>一</sub>」(引用13)、(ニ)「好<sub>レ</sub>奇」(引用9)、「不<sub>レ</sub>嫌<sub>レ</sub>奇」(引用10)、(ホ)「出<sub>二</sub>變局<sub>一</sub>」(引用9)、(ヘ)「厭<sub>二</sub>常套<sub>一</sub>」(引用9)、「厭<sub>レ</sub>讀<sub>二</sub>爛熟詩<sub>一</sub>」(引用12)などや、以下に論及せんとする(ト)「時寓<sub>二</sub>新意于枯澹<sub>一</sub>」(引用15)、(チ)時代を界畫しない實態(四の2)などは、何れも性靈説の主張と一致している。然らば松塘の性靈説は袁宏道に出ずるものであろうか、袁枚を學んだものであろうか。

## 2 袁枚を學んだ具體例

松霽師(引用1)の詩を評して曰く、

(15) 蓋師之詩、不<sub>レ</sub>專<sub>二</sub>一體。而尤得<sub>二</sub>力七絶<sub>一</sub>。阮亭神韻、簡齋性靈、師爲<sub>二</sub>能兼<sub>一</sub>焉。尤嗜<sub>二</sub>三元詩<sub>一</sub>、時寓<sub>二</sub>新意于枯澹<sub>一</sub>。(遺集附録、松霽山房遺稿序)

阮亭即ち王士禎の神韻説と簡齋即ち袁枚の性靈説とを舉げて、能くこの兩者を兼ね得たことを以て松霽師の詩を推稱し



たという事實は、松塘がこの兩説に關心を抱き、而も之を重視した事を示している。

梗概の章に述べた通り、松塘は遠游を好んだが、北游存稿自序（遺集附録、房山樓集自序も同じ）によると、それは袁枚の遠游を慕い、それを繼ぐことが自分の志であると明言している。曰く、

⑯昔袁子才、暮年好游、再登天台、又游黃海、及七十、更爲嶺南萬里之行。可謂盛矣。余雖老矣、氣力未減。而嘗慕子才之游。從今之後、舟車所通、將繼之游、而遍究海內名勝。是余之志也巳。

清の袁枚（康熙五十五年（一七一六）生、嘉慶二年（一七九七）歿、八十二歳）が暮年游を好んだ事は、乾隆四十九年六十九歳の時の作「花朝後三日、作嶺南之遊、留別隨園、六首。」（小倉山房詩集卷三十）に始まる六十二葉に亙る多數の詩によつて知られるし、その心境は右の詩の

(17) 三年遊屐未曾停 又作珠江萬里行

老驥不知筋力減 閒雲只覺往來輕（錄前聯）

によく表われている。再び天台に登つたのは、乾隆五十七年七十七歳の時で、二月二十八日出發し、五月二十一日歸宅して居り、この時の作品は小倉山房詩集卷三十四に數多く收められている。なお最初天台に登つたのは、乾隆四十七年六十七歳の時で、その作品は卷二十八の半ばを占めている。松塘が引用16のような意見を發表したのは、袁枚の詩集を讀んでいた事を明證しているし、「余雖老矣、氣力未減」（引用16）と力んだ松塘の發言は、袁枚の詩句「老驥不知筋力減」（引用17）によつたものに相違ない。

松塘に及ぼした袁枚の影響は以上によつてはつきりしたと思うが、更に重ねて袁枚の詩文集を讀んだと思われる例證を二・三舉げよう。枕山は早くから松塘と詩交を結んだ詩人であるが、松塘の「登一覽臺作歌」と題する長篇（引用10）を評した時に、松塘と共に陸游に注目した事、袁集を喜んだ事を明らかにしている。

枕山曰、余與彦之夙訂詩交。兩人注意老陸。既而余讀袁集、詩格一變。彦之亦稍稍喜袁。此首學其棲霞長句。

縱横奇姿與之可<sub>レ</sub>以接武矣。(房山樓詩、卷二)

ここに云う袁集は袁枚の詩文集であることは「此首學其棲霞長句」の語によつて明らかである。棲霞とは江蘇省江寧縣に在る棲霞山(一名攝山)及びその麓に在る寺名で、小倉山房詩集・附續集には棲霞山や棲霞寺を題材とする詩篇が散見する。その中で「學其棲霞長句」に相當する長篇の古詩は「同金十一沛恩、遊棲霞寺、望桂林諸山。」(卷一)か「十月八日、同陸君景文汪婿履青及府署中諸君子、遊棲霞七星洞。方知五十年前、夏日阻水、遊未盡其奇、詩未殫其妙、補作一章。」(卷三十)であらう。この二首は棲霞山の奇巖怪石や洞窟の貌を詠じたものであるが、後者は乾隆四十九年、前者の乾隆元年より約五十年後の作で、前作が棲霞の妙を殫していない所があるのを補つたものであるという。松塘の「登一覽臺作歌」の長篇は、その詩材に於て、構想に於て、五言句と七言句の混用に於て、次に示すような各句の表現に於て、後者の詩に類似する點が多い。以下に兩詩を比較する(縦實線の上は袁枚の詩句、下は松塘の詩句)。

○高空都被芙蓉遮(第八句)——萬朵芙蓉爭崔巍(第六句)

○山腰有洞五里許(九句)  
乘火直入衝烏鴉(十句) } 旋入洞門如排闥(十八句)  
下視山腰雲一抹(二十句)

○怪石成形千百種(十一句)——突然怪石欲壓頭(十七句)

○出穴登高望衆山(十五句)  
茫茫雲海墜眼前(十六句) } 蒼海浮木末(十二句)  
一層一層勢益高(十九句)  
下視山腰雲一抹(二十句)

○蚩尤噴妖霧

尸羅袒右肩

猛士植竿髮

鬼母戲青天

〔五百羅漢遍山巖〕（二十一句）  
〔袒衣露體瘦巉巖〕（二十二句）

上下の詩句を比べると詩材・構想・用語・表現に於て哀詩に類似している事が分る。これを枕山が「其の棲霞の長句を學ぶ」と評したのである。これだけではない。次の「落花五首」と題する詩も哀枚の「落花」の詩十五首（小倉山房詩集卷三）を學んで成つたと思われる。その中の一首を例に取ると、

(18) 落花五首、其二

房山樓詩 卷二

莫將開落問東皇 有限繁華易夕陽

臨水難尋當日影 倚欄猶唱滿庭芳

三春綺夢風前遠 十里珠簾雨裏涼

縱使紅顏空谷棄 寧追柳絮學顛狂

哀詩に類似する點を指摘すると、第一句は哀詩の「清華曾荷東皇寵」飄泊原非上帝心（第三首の第三・四句）の想を襲つてゐる事は明らかであるし、第五句は哀詩の「春在東風原是夢」（第一首の第三句）と「風前零落曉霞粧」（第六首の第二句）から出ているように思うし、第六句の春雨の景色は、哀詩では「仙雲影散留春雨」（第一首）「風雨瀟瀟春滿林」（第二首）「疏雨半樓人意懶」（第六首）「烟雨」（第七首）「雲雨」（第八首）などと頻りに用いられているし、「珠簾」の事は哀詩では「掃逕適當風定後 卷簾可惜客來時」（第二首）「翠波簾幙影沈沈」（第三首）などと用いられ、第二句の「易夕陽」と第四句の「倚欄」は、哀詩の「三月憑欄日欲斜」（第一首の第二句）とあるし、第七句の「空谷」は哀詩にも「空谷半枝隨影墜」（第四首の第五句）と用いられている。而して全篇の構想は哀詩の「后土難埋一瓣香 風前零落曉霞粧 丹心

枉<sup>レ</sup>自填<sup>ニ</sup>溝壑<sup>ニ</sup> 素手曾經捧<sup>ニ</sup>太陽<sup>ニ</sup>」(第六首の前半)から導かれているようである。その他袁枚の詩句を襲用し、袁詩の韻を用いて詩を作っている。用韻の一例を挙げると、「己巳新正、張南村明府席上、用袁簡齋與劉霞裳元旦舟中聯句韻、賦呈云云」と題する詩(第三編卷三)の韻字は、風・宮・功・濛・工・終・中・篷・紅・同・東・通で、これは袁枚の「乙巳元旦舟中與霞裳聯句」と題する詩(小倉山房詩集卷三十二)の韻字と全く同じである。

松塘が袁枚を推重し袁枚を學んだのは、その性行上に於ける類似點も原因となつてゐるに思われる。袁枚は性伉爽・通脫(枚の語)の故に早く官途を退き、三十四歳以後は南京に僑居して隨園を營み、その中に或は遠遊して山水の間に優游自適する事を樂しみ、八十二歳の高齡を以て歿したのであつたが、松塘も亦性天真に任せた(松塘の語、引用3)ために、富貴を望まず、生涯官仕せず、耽酒讀書(枚は酒を好まなかつた、この點は異なる)、詩文を以て任じ、七曲草堂中に或は遠遊して山水の間に優游自適して七十六年の生涯を終つたのであつた。

以上の具體例によつて、松塘の性靈説は袁枚を學んだ事が明らかになつたが、袁枚の詩論と松塘の詩論と結びつくものがあるかどうか、兩者を比較検討してみる。先ず「詩者其人心血所<sup>レ</sup>注、性靈所<sup>レ</sup>寓。」(引用14)と詩を定義した松塘の主張は、「凡詩之傳者、都是性靈、不<sup>レ</sup>關<sup>ニ</sup>堆垛<sup>ニ</sup>。」(隨園詩話、卷五、5b、(戊午校正、上海文明書局藏版)以下同じ)と主張し、その他卷一1a、卷八1a、卷十三6b、補遺卷二10b、補遺卷十5a等に於て性靈を主張している袁枚の説に結びつく事は云うまでもなからう。次に「寫<sup>ニ</sup>性情所<sup>レ</sup>感與<sup>ニ</sup>耳目所<sup>レ</sup>觸<sup>ニ</sup>。」(引用13)と云い「性情」を主張しているが、「性情論」は袁枚の詩論に於ても中心を爲すもので、隨園詩話卷一1a2a、卷二9a、卷六6a11a、卷七7b10b、卷八13a、卷十四14b、卷十六7b、補遺卷一1a、同卷二8b、同卷九2a、同卷十1a1b3a等に出ている。中でも「詩者人之性情也。近取<sup>ニ</sup>諸身<sup>ニ</sup>而足矣。」(補遺卷一1a)は松塘の言葉に近いものと云えよう。その他「一字推敲枉費<sup>ニ</sup>功<sup>ニ</sup>、半生我漸悔<sup>ニ</sup>雕蟲<sup>ニ</sup>。」(引用8)や「世上小兒誇<sup>ニ</sup>雕蟲<sup>ニ</sup>。」(引用12)などは、袁枚が曹廷棟の詩句「……詩眞豈在<sup>レ</sup>分<sup>ニ</sup>唐宋、語妙何曾露<sup>ニ</sup>刻雕<sup>ニ</sup>。」に對して「余稱<sup>ニ</sup>其詩專主<sup>ニ</sup>性情<sup>ニ</sup>。」(詩話卷二9a)と云つた事や、或は「詩宜<sup>レ</sup>樸、不<sup>レ</sup>宜<sup>レ</sup>巧。」(詩話卷五7a)の主張に通ずるものであり、松塘の「寓<sup>ニ</sup>新意于枯澹<sup>ニ</sup>。」(引用15)や「厭<sup>ニ</sup>常

套」(引用9)という主張は、袁枚の「要之以下出新意去陳言爲第一著」(詩話卷六<sup>7a</sup>)や、漫齋語錄の語句「下語要平淡」を引用して「余愛其言」(詩話卷八<sup>8a</sup>)と云い、或は「詩宜澹、不<sub>レ</sub>易濃」(筆者案、易(は宜の誤か))」(詩話卷五<sup>7a</sup>)と云つた事に通ずるものであり、松塘の「好<sub>レ</sub>奇」(引用9)「不<sub>レ</sub>嫌<sub>レ</sub>奇」(引用10)の主張は、宋元の詩をも推重した袁枚の「至宋元而愈出愈奇」(詩話卷六<sup>4b</sup>)に通ずるものであり、松塘の或は唐或は宋と時代を界畫しない主張<sup>四章</sup>の<sup>2</sup>は袁枚の特定の時代・人物を界畫しない主張(詩話卷一b、卷一<sup>9a</sup>、卷三<sup>2b</sup>、卷四<sup>8b</sup>、卷五<sup>6b</sup>、卷七<sup>6a 6b 7b 12b</sup>、卷十六<sup>1a</sup>、遺補卷一<sup>2a</sup>)と通ずるものである。(注) aは表をbは裏を示す。

#### 四 總括—宋詩と性靈說を中心とする折衷派—

##### 1 先人の評

同門の大沼枕山は、松塘詩鈔に題言を撰するに長句一篇を以てし、

……今日大集付<sub>二</sub>校刻<sub>一</sub>。逆知傳播及<sub>二</sub>遐域<sub>一</sub>。詩派正大詩才精。不<sub>レ</sub>西不<sub>レ</sub>東成<sub>二</sub>一則<sub>一</sub>。(枕山詩鈔二編卷上、松塘詩鈔引)

と云つて、松塘の詩は西でもなく東でもなく(折衷して)一家を成すものであると評している。島田篁村も亦「房山樓詩集第三篇序」に於て「貫<sub>二</sub>穿百家、掇<sub>二</sub>其菁英<sub>一</sub>」とか「其所<sub>レ</sub>作、變化百出、不<sub>レ</sub>名<sub>二</sub>一體<sub>一</sub>。」とか評して、松塘は諸家を折衷するものと云つてゐる。

房山樓詩(版本)の上欄には師の星巖、同門の枕山の他に驚津穀堂・蒲生襲亭等の評語を收載してある。それによると松塘評はまちまちで定つていないが、概して云うと、時代的には唐風・唐調とする者、宋風とするものが多く、個人的には宋の陸游、清の袁枚の風と評している者が多い。しかしこれも一致した意見ではなくて、唐の杜甫、宋の蘇軾、金の元好問、明の唐寅、清の王士禎の風を得たものとする評語もある。要するに松塘の詩風は、或は唐或は宋或は明或は清と時代を界畫するものではないということに歸すると思う。又詩論上からは、性靈說を主張した袁枚の風とも、神韻說を主

張した王士禎の風とも評されている。先人の評を綜合すると、折衷して一家を成したものと観るべきであろう。この事は本稿の結論と一致する。

## 2 結論

引用15は、松塘五十二歳の時の作で、王士禎の神韻説や袁枚の性靈説を重視していた事實を示すものであると解釋したが、格調の高さも亦看過してはいない。松塘は二十五・六歳以後詩風が變化し、奇を好み、變局を出し、性靈説へ傾いた事は既に述べたが、慶應元年四十三歳の作「梅花絕句二十首」と題する詩二十首の中の一首に、

(19) 其二十 房山樓集第三編 卷一

休對梅花唱我詩、我詩多恐澆冰姿、

從今飲水清肺肝、飽嗅芳香養藻思、

とある。これを讀むと、梅花を以て所謂玉壺冰心とて清さを現わす冰の姿に似ているとし、その梅花を自分の詩によつて澆すことを恐れ、今から水を飲んで肺肝を清掃し、芳香を嗅いで藻思を養い、汚れない香り高い詩を作ろうと志していた事が察知される。これは自分の詩を格調高いものにしたという意向の表現で、空海の文鏡秘府論に云う、意はこれ格、聲はこれ律、意が高ければ格が高く、聲が辨らかであれば律が清い云々という詩の境地（卷四、論文意參照）と同じ意味での格調の高いものを求めているのである。かく解すると、松塘は性靈説を宗としながら、神韻の境地も格調の高さも備えようとした詩人であると觀てよい。

更に又松塘の詩篇中に散見する詩人の引用についてその頻度を調査してみると、引用回数は寧ろ少い方であるが、袁枚に次いで多いのは、左思・嵇康・阮籍・陶潛（以上晉）、李白・高適・杜甫・杜牧（以上唐）、蘇軾・陸游（以上宋）、金の董解元、清の吳偉業であり、就中印は最も多く、——印がこれに次ぎ、明の前後七子の引用は殆んど見られない。即ち松塘の作品中に引用された詩人の實態に徴すると、宋詩を代表する蘇軾と陸游を最も推重してはいるが、宋代のみを界畫せ

ずに各時代に互つてゐる。

以上によつて松塘の詩風・詩論は、先人の評にある通り、一體に拘わるものではない。私は松塘の詩風・詩論は、宋詩を中心とし衰枚の性靈説を中心とする折衷派であると結論したい。松塘は時に隨つて詩格が變化して窮りがない事を貴んだ詩人であつた。詩友にして同門の大沼枕山の詩を稱して曰く、

(20) 愛<sub>三</sub>君詩格變無<sub>レ</sub>窮、醉向<sub>二</sub>人間氣吐<sub>レ</sub>虹。(松塘小稿、同子壽遊大房山、用東坡先生松江韻二首、の其二の内詩句)

同じく同門の詩人岡本黃石の詩を欽して曰く、

(21) 最欽詩格隨<sub>レ</sub>時變、廊廟江湖兩見<sub>レ</sub>眞。(遺集、卷三、祝岡本翁八十壽筵、兼題其黃石齋集、次其自壽韻、の詩句)

前者は弱冠二十歳の頃の言であり、後者は六十八歳の時の語であり、年と共に變化し、發展しかつ折衷する態度は松塘の生涯を一貫したものであつたと觀てよい。

(和歌山大學教授)